みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

［書評］大久保恭子著『「プリミティヴィスム」と「プリミティヴィズム」：文化の境界をめぐるダイナミズム』(第8回木村重信民族藝術学会賞)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 憲司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5143

第８回木村重信民族藝術学会賞

大久保恭子著
『「プリミティヴィスム」と「プリミティヴィズム」——文化の境界をめぐるダイナミズム』

三元社、2009年７月発行、定価2,940円（税込）

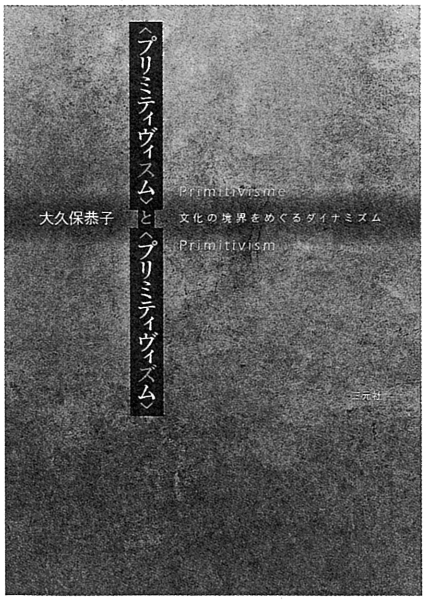
吉田憲司

本書は、モダン・アートの展開におけるプリミティヴィズムの問題を真正面から取り上げた労作である。

20世紀の後半の記念碑的な展覧会となった、1984年ニューヨーク近代美術館（MoMA）での展覧会「20世紀美術におけるプリミティヴィズム——モダンなるものと部族的なるものの親縁性」展を契機に、モダン・アートの展開におけるプリミティヴィズムの問題に、美術史学・芸術学・人類学・歴史学といった分野の枠を超えて、新たな光が投げかけられるようになった。その議論のなかで、モダニズムとプリミティヴィズムとは、単なる影響関係の有無の問題というのでなく、いわば表裏一体の現象として理解すべきものであるという認識が広く共有されるようになってきた。モダニズムの研究において、プリミティヴィズムが、きわめて重要な問題系として浮上してきたといってよい。

ただ、日本においては、このプリミティヴィズムの問題を正面からとりあげた単行書はこれまでになく、大久保恭子著書『「プリミティヴィスム」と「プリミティヴィズム」——文化の境界をめぐるダイナミズム』は、その嚆矢として位置づけられるものとして、まずその出版自体が高く評価される。

本書はおおきくいえば、序章と終章の間に第１部と第２部を挟むという構成をとっている。序章では、造形芸術にみられる「プリミティヴィスム／プリミティヴィズム」の展開がまず概観される。続く第１部では、西欧、とくにフランスにおける「プリミティヴィスム」の展開が論じられている。そのうち、第１章ではマティス、第２章ではゴーガンという個別の作家に焦点が当てられ、第３章では、20世紀初頭における、いわゆるアール・ネーグルの発見から、1989年のポンピドゥー・センターでの展覧会「大地の魔術師」展に至る時期、すなわち20世紀のパリを舞台にした「プリミティヴィスム」にまつわる言説・認識の変遷が追跡されている。



第２部では、アメリカ合衆国における「プリミティヴィズム」が議論の俎上に載せられる。その第１章では、「20世紀モダニズム」の歴史を作り上げたともいえるニューヨーク近代美術館（MoMA）の発した「プリミティヴィズム」にまつわる言説が丹念に検証されている。続く第２章では、時間をさかのぼるかたちで、MoMA の開設以前のアメリカにおけるモダニズムとプリミティヴィズムの関係が考察されている。

こうした一連の議論のなかで、著者が丹念な資料の渉猟のもとに指摘した事実には、これまで知悉さ

れていないものも多く含まれ、その事実の発掘の功績は多としてよい。個々の時代・場所・作家・研究者等によって、この西洋が「プリミティヴ」とみなした「他者」もしくはその「他者」の造形のとらえ方は多様である。その異同を、20世紀初頭からケ・ブランリー美術館の開館までという、20世紀全体の枠組みのなかで検証した本書は、我が国における今後のこの問題の研究の参照枠となっていくものと思われる。

もとより、本書にも、残された課題がないわけではない。「プリミティヴィスム／プリミティヴィズム」を「自己を規定しなおす試み」と捉える筆者の議論においては、西洋の自己運動の特徴は浮き彫りにされているが、それによって「他者化」された対象、すなわちアフリカやオセアニア、南北アメリカの文化や社会が被った影響については深く論じられていない。これらの地域の民族や文化についての表記や同定の誤りも散見される。「プリミティヴィスム／プリミティヴィズム」という、西洋における思潮のもつ政治性・権力性の考察には不十分な感が否めない。

また、著者は、著書のタイトルにもある通り、「プリミティヴィスム」と「プリミティヴィズム」の違いを強調するが、さきにも述べたとおり、個々の時代・場所・作家・研究者等によって、この西洋が「プリミティヴ」とみなした「他者」もしくはその「他者」の造形のとらえ方はそもそも多様であり、それを「プリミティヴィスムとプリミティヴィズムとは異なる」と主張することは、問題を解決するよりも、むしろ新たな問題を付け加えることになるように思われる。

上述のような本書の構成からもわかるとおり、第1部のフランスに関して中心的に取り上げられているのは作家たちの活動や認識のあり方であり、一方、第2部のアメリカ合衆国に関して取り上げられているのは、美術館や美術展をめぐる言説のあり方である。取り上げられている事象の位相がそもそも異なっている。すでに本書の議論のなかでは、それぞれの時代、それぞれの地域、人物の「プロミティヴィズム／プリミティヴィスム」の異同は論じられており、「プリミティヴィスムとプリミティヴィズムとは異なる」とことさら唱えずとも、それらの議論だけで本書は十分な達成を見ていると評価される。

称賛に値する労作であることを言明したうえで、あえていくつかの問題点を指摘したが、冒頭でも述べたとおり、プリミティヴィズムの問題を正面から取り上げた単行書はわが国にはこれまでになく、またその問題をこれだけの時間的広がりのなかで論じた類書もない。本書の出版を大いに歓迎したい。

（よしだ　けんじ）